

論文

16世紀後半の青花碗に関する検討

－中世大友府内町跡出土の小野編年碗E-Ⅸ類について－

幸 稔 温

はじめに

「青花」とは、中国で生産されていた白い素地にコバルトで絵付けをし、透明釉をかけ1300℃以上の高火力で焼成された彩色磁器を言う。

元～明初では、碗の口縁部形態の中で外反するものが主に生産されていたが、明代中期に入っからは口縁部が直線的に開くものが主体を占めるようになる。口縁部が外反するものは一度姿を消したように見えたが、16世紀後半から再び出現する。それは、小野正敏の論文「15世紀～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」⁽¹⁾（以下、小野1982）で提唱された小野編年碗E-Ⅸ類端反りタイプにあたる。

このことを踏まえ、大分県に所在する「中世大友府内町跡」から出土する碗E-Ⅸ類に着目し、他の消費地遺跡との年代特定を行うことで、16世紀後半の碗形式の遷移状況について検討する。

1、明帝国と景德鎮窯の歴史

はじめに明帝国時代の景德鎮窯製品について概観する⁽²⁾（図1）。

明代初期は、元末期の混乱から西方より輸入していた良質なコバルトの「蘇麻離（ソマリ）青」⁽³⁾の輸入が途絶えたことにより、質の悪いコバルトを使用しなければならなかった。やがて、永楽期（1402～1424）になると、積極的な外交貿易政策により蘇麻離青の輸入が再開された。官窯の整備とともに諸技術も急速に上達したことから、次の宣徳期（1425～1435）に至るまで青花の黄金時代と呼ばれた。洪武期（1368～1398）以来、朝貢船を除き貿易活動などを禁止する「海禁令」があり、この政策は1567年まで続いたが、厳密な規制はされず、海外でも中国製陶磁器が流通していた⁽⁴⁾。



図1 中国の地図（●は都市、○は窯址）

明代中期になると、景德鎮窯はより繁栄を見せたが、焼成費用が巨額になったため官窯の活動が調整された。また、成化期(1464～1487)には、蘇麻離青が尽きたことにより、国内で採れる「平等青」⁽⁵⁾が使用されるようになった。

明代後期になると、焼成量が増加し官窯だけでは焼成をまかないきれなくなったことから、官窯から民窯へ委託焼成する「官搭民焼」が始まった。これにより官窯と民窯の技術的格差が狭まり、次第に御器廠の権威・指導性が弱体化した結果、景德鎮窯の生産主体は官窯から民窯へと移行していった⁽⁶⁾。また、正徳期(1505～1521)から、イスラム圏より輸入したコバルトの「回青」が使用されるようになった。

以上、景德鎮窯の青花生産は、当時の時代背景と密接な関係があった。

2、15・16世紀の青花編年(小野編年)

日本では、青花の分類・編年について、天正3(1575)年に焼亡した一乗谷朝倉氏遺跡の出土品を中心とした小野1982と、天正13(1585)年に焼亡した根来寺跡の出土資料をもとにした上田秀夫の「根来寺出土の染付について」⁽⁷⁾が、現在の基準となっている。

これ以降の研究では、上田1991⁽⁸⁾や鈴木秀典1990⁽⁹⁾によって、16世紀後半～17世紀前半に大坂・堺で出土する粗製の青花に関する分類・編年が示されている⁽¹⁰⁾。

本稿では、小野1982を基準としながらも、さらに、青花と白磁の器形特徴の関係性を確認するために、森田勉の「14～16世紀の白磁の分類について」⁽¹¹⁾も参考とし、今回は碗を検討する。

小野1982は、碗をA～F群に分類しており、分類は以下の通りである。

碗A群は、14世紀後半～15世紀初頭に見られ、口縁部が外反する碗で、口径に対し小さな高台を持つ。また、森田勉の白磁編年で紹介されている「枢府磁」の一群とされている碗B群と器形特徴が類似することから、密接な関係があると指摘されるものである⁽¹²⁾。文様構成は、「元様式青花」と呼ばれているもので、外面腰にラマ式蓮弁帯、胴の菊・牡丹・宝相華唐草、見込みに蓮池水禽・蓮束文、口縁内側に唐草文を描く碗が見られる⁽¹³⁾。

碗B群は、14世紀後半～15世紀後半に見られ、口縁部が外反する碗で、後述する碗C群～碗F群に比べると高台が厚目で若干高く、ヘラ削りもしっかりしている特徴を持つ。文様構成は、口縁部の内外に四方禪文や雷文帯が施されることが多く、胴に牡丹唐草・宝相華唐草文、見込みには梅月文・ねじ花文・「福」字などを描く碗が見られる。

碗C群は、15世紀後半～16世紀後半に見られ、口縁部が直線的に開く碗で、見込みは高台内に落ち込む器形である「蓮子碗」の形状を呈する。文様構成は、単純な文様構成を持つものが多く、文様が固定化されている。例として、胴部に芭蕉葉文を配置し、口縁部の波濤文、見込みには蓮花か法螺貝が描かれるものが見られる。

碗D群は、15世紀後半～16世紀末に見られ、口縁部が直線的に少し開く碗で、見込みが平坦に広くとった大きな高台をもつものである。文様構成は、アラベスク風の文様、口縁に波濤文帯、

見込みには碗C群でも見られる蓮花や法螺貝、十字文花などといったものが施されている⁽¹⁴⁾。

碗E群は、16世紀中頃～16世紀末に見られ、見込み部分がゆるやかに盛り上がっている「饅頭心」⁽¹⁵⁾の形状を呈する。口縁部は比較的直線に開く碗で、高台暈付のヘラ削りが小さく、断面は丸い。文様構成は、胴部内外面共に無文で、見込みに折菊・人物を配置することが多く、高台には「大明年造」・「天下太平」など字款が描かれる碗E-VII類があり、口縁内部に四方禪文を持つ例も多く、胴部に暗文花がついているものも見られる。碗E-IX類の中には、口縁部が外反するものと外反しないものも含まれているが、外反するものが多い(以下、外反しないものを碗E-IXA類、外反しているものを碗E-IXB類とする)。また、碗E-IXB類は碗E-IXA類のものとは、文様構成がやや異なる。

碗F群は、16世紀末～17世紀に見られ、口縁部が直線的に少し開く碗で、腰から胴へかけて全体的に丸味を持った特徴をもっている。見込みが平坦で高台は外に開き、暈付の釉をとらずに珪砂敷で焼成されているため、それが細かい糸状に付着している。また、高台内は兜巾状に削られ、全体的に施釉されている。文様構成は、胴に唐草文、見込みには宝相華や折枝の花文が描かれており、中には、内面胴部に唐草文、口縁部に四方禪文を持つものが見られる。

この様に、碗A群・碗B群(14世紀後半～15世紀末)までは口縁部が外反する碗が主流であったが、この器形は15世紀末で一度途絶える。碗C群～碗F群(15世紀後半～17世紀初頭)では、口縁が直行しているものが主流になっていたが、碗E-IXB類が出現したことで、口縁部が外反する碗が復活していたことが指摘できる。

次章からは、中世大友府内町跡出土の碗E-IXB類を検討していく。

3、中世大友府内町跡で出土する碗E-IX類の詳細

日本の16世紀後半の消費地遺跡から、口縁部が外反している碗E-IXB類が出土する⁽¹⁶⁾。文様構成は、高台内に年款・吉祥句などを施すものや、碗E-VI類のように、見込みに団花状の唐草文や如意雲文を描くものがある。また、碗E-VIIB類や碗E-VIII類にみられる人物(唐人)文が外面胴部に描かれている。この時代、中国では万曆帝(1572～1620)の治世にあたる。

以下では、中世大友府内町跡出土品中の碗E-IXB類を抽出した。その結果、景德鎮窯系製品の碗E-IXB類105点を確認することができ、その内訳は、碗83点、小碗22点となった。

第2図には、収集した碗E-IXB類の中でも文様が代表的なものを8点挙げている(第2図)。

1～7は、景德鎮窯系青花碗である。1は、復元口径13.2cm、器高6.5cmを測る。外面胴部に花・岩の文様を描く。2は、口径14.9cm、復元底径6.6cm、器高7.6cmを測る。外面胴部に花草文を施し、口縁部内面に四方禪文を描く。3は、復元口径11.8cm、底径5.1cm、器高6cmを測り、外面胴部に宝文が描かれ、底銘が入る。4は、復元口径15.2cm、復元底径6.2cm、器高7.75cmを測る。外面胴部に毛彫りで暗花文を施し、口縁部内面に四方禪文を描く。底銘には、「万福攸同」と記されている。5は、口径12.2cm、底径4.8cm、器高6.5cmを測る。外面胴部に唐草文を施し、口縁部

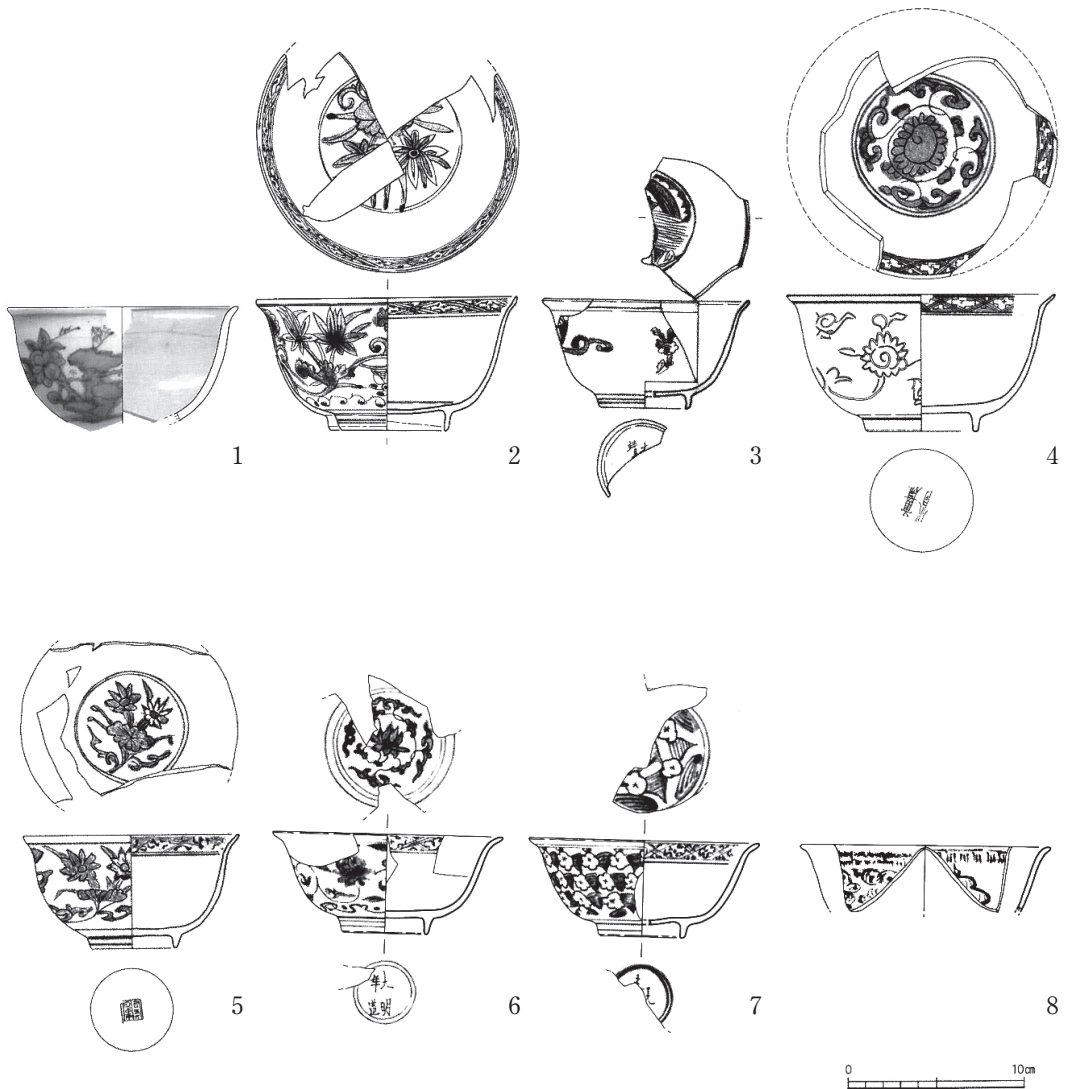


図2 中世大友府内町跡から収集した景德鎮系青花(碗E-IXB類)

- | | |
|----------------------------|-------------------------|
| 1. 『豊後府内 4 (第2分冊)』第18次調査 | 5. 『豊後府内 17 (第1分冊)』第80次 |
| 2. 『豊後府内 15』第51次調査 | 6. 『大友府内 10』第17次A区 |
| 3. 『豊後府内 17 (第1分冊)』第11・76次 | 7. 『大友府内 25』第109-1次 |
| 4. 『豊後府内 17 (第1分冊)』第80次 | 8. 『大友府内 25』第109次 |

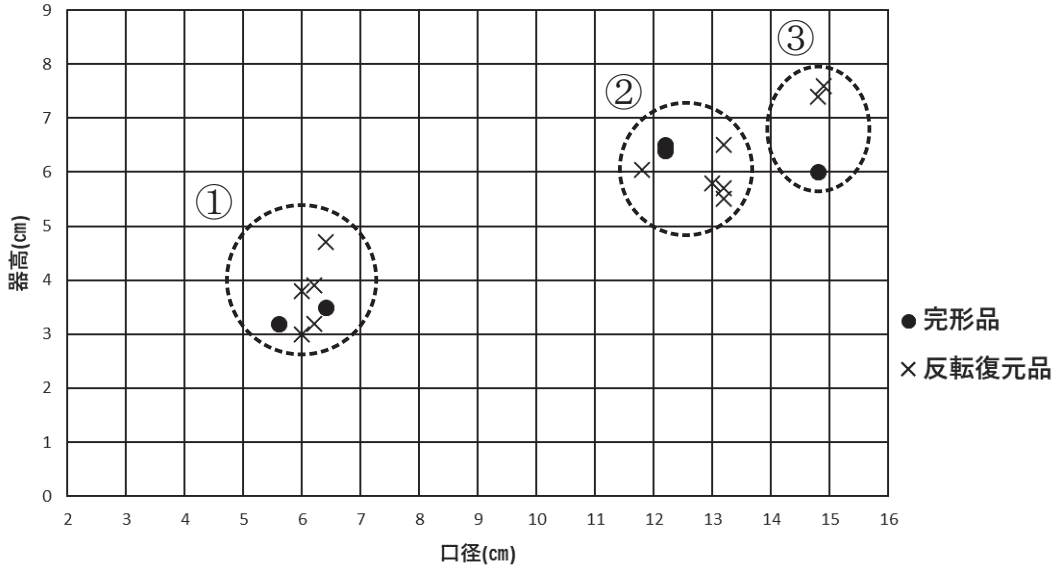


表1 碗E-IXB類の器高と口径の関係

内面に四方禳文を描く。底銘には、「異体字」が記されている。6は、復元口径13.2cm、底径4.9cm、器高5.7cmを測る。外面胴部に唐草文を施し、口縁部内面は四方禳文を描き底銘に「大明年造」と記されている。7は、復元口径13.2cm、復元底径4.9cm、器高5.5cmを測る。外面胴部に花文のような文様が施され、口縁部内面には四方禳文を描く。

8は、反転口径14.2cmを測り、16世紀末から出現するペンシル・ドロウイングと呼ばれる細書技法を施していることから漳州窯製品と考えられるが、参考資料として挙げておく。また、後述する大坂城船場出土の碗E-IXB類の2点（第4図-3・4）も漳州窯製品と考えている。

このように、収集した碗E-IXB類を見てみると碗E群の特徴である「饅頭心」の特徴を持つものが無く、ほとんどが碗F群のように見込みが平坦になっていることが分かった。

4、碗E-IXB類の法量検討

収集した碗E-IXB類の中で見つかった法量を復元できる資料から表1を作成した。縦軸は器高、横軸は口径として散布図にした。碗E-IX類の散布図を参照すると、それぞれ①器高3～5cm・口径5～7cm、②器高5～7cm・口径11～14cm、③器高6～8cm・口径14～16cmの3つのグループにまとまった。この3つのグループは、完形品のみで分析した場合とほぼ同じ範囲にまとまっており、器種としては①のグループは小碗、②と③のグループは碗に分けられる⁽¹⁷⁾。

明代の「度」は1寸=3.1cmとされている⁽¹⁸⁾。各グループの口径の平均値を出してみると、3.1cmの半分である1.55cmの倍数に近い数字になったことから、碗E-IXB類の口径分布は1寸=3.1cmの尺に対応しているものと考えられる。

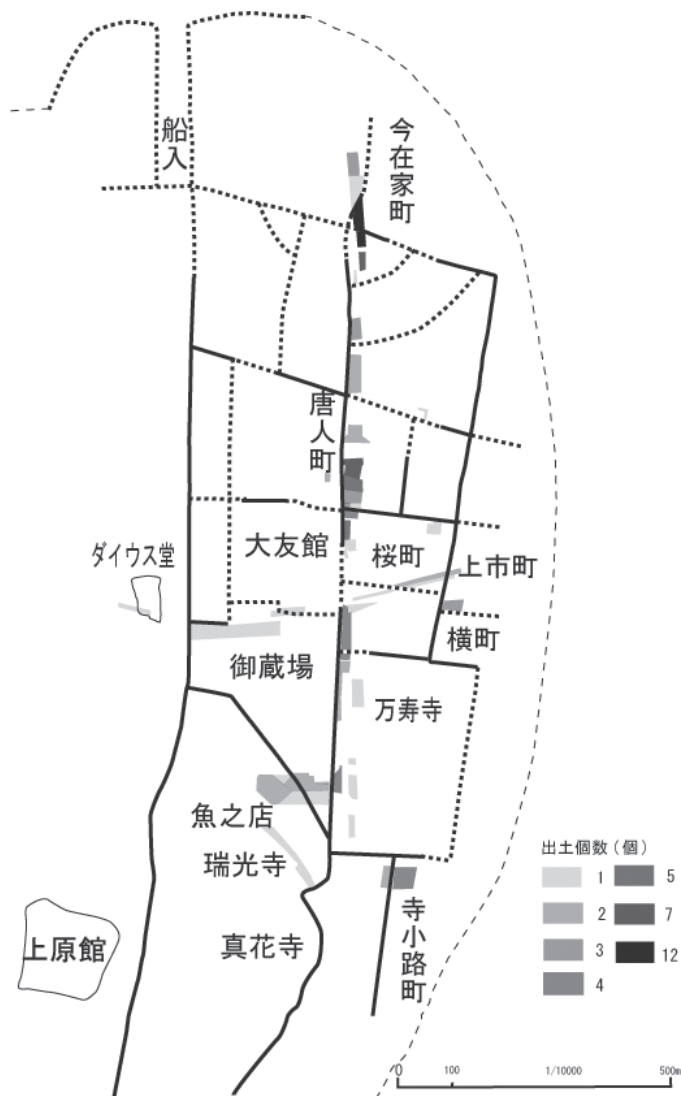


図3 中世大友府内町跡の出土分布

5、中世大友府内町跡における出土分布

中世大友府内町跡から出土した碗を、『大分市史』中巻の附図に記載されている「戦国時代の府内復元想定図」⁽⁴⁹⁾をもとに出土散布図を作成した(第3図)。

中世大友府内町跡のメルクマールとなる天正16(1587)年の整地層は、前年の島津軍による侵攻によって生じた火災処理層である。この層の痕跡は府内の広範囲で確認され⁽²⁰⁾、今回収集した碗E-IXB類のほとんどがこの層から出土し、唐人町といった第二南北街路の一部からは、焼土層下位の遺構からも出土している。

碗E-IXB類の出土した調査地点層と碗E-IXB類の関係をトーンの階調で表すと、中世大友府内町跡のメインス

トリートで、富裕層が住んでいたと推定されている第二南北街路沿いから多く出土しており、特に「今在家町」(第105・106次)と「唐人町」(第14次)に集中していた。「今在家町」の16世紀末の土地利用状況は、寺小路町や桜町などで解明されつつある町屋の構造とは違うことと、柵または堀などの遮蔽施設に囲まれていたことから、屋敷地跡と考えられている。また、「今在家町」は、府内町最北端である荷揚げ地の周辺にある屋敷地であることから、仲屋宗悦に代表される政商が所有していた可能性が高い。大友館の北方に接する「唐人町」は、日本人と中国人が混住する「チャイナタウン」であったと考えられる町である。また、「唐人町」の南には、「桜町」(第12・18東・28・59・67・91・92次)と呼ばれる屋敷があり、16世紀中葉以前の遺物が出土しないことから、町が短期間に形成されたと考えられている。

第二南北街路以外では、出土数は少ないが「魚ノ店」(第36・41・69・75・104次)、「ノコギリ町」(第25・36・41・50・69・77次)、「ダイウス堂」(第26・32・99次)、「瑞光寺」(第61・71次)、「横町」(第17次)から出土している。「魚ノ店」、「ノコギリ町」、「横町」は武士や商人ではなく、庶民が住んでいた町域と考えられている。

以上のことを踏まえ出土傾向を伺うと、横町など非富裕層の地域では出土数が少なく、荷揚げ地周辺や、富裕層の居住が想定される第二南北街路軸の大友館～唐人町において、碗E-IXB類が集中して出土していることから、高級品であったといえる。

6、考察

収集した碗E-IXB類をまとめてみると、器形面では、小野編年で定義されている碗E群の器形特徴である「饅頭心」の特徴が見られず、碗E群ながら碗F群のように見込みが平坦であることが指摘できる。

また、文様に注目すると、表のように大きくa・b二つのグループに分けることができた(以下、E-IXB a類・E-IXB b類)。碗E-IXB a類グループは、口縁部内面に四方禪文を施すグループで、胴部外面に花草文・暗花文・唐草文・丸文・花文・蓮花文、高台内に「萬福攸同」・「異体字」が描かれている。碗E-IXB b類グループは、口縁部内面に四方禪文を施さないグループで、胴部外面に、唐草文・宝文・唐人が描かれている(表2参照)。今回まとめた文様構成から、碗E-IXB a類グループは暗花文・四方禪文など小野編年碗E-VIIA類の文様構成に近く、碗E-IXB b類グループは小野編年碗E-IX群の文様構成に近い。よって、文様は、碗E群の系統と共通点が多いことが指摘できる。

出現年代に関しては、府内の1587年の火災処理層や、大坂城・堺環濠都市遺跡の慶長20(1615)年の焼土層からも同じ器形特徴を示すものが出土していることから、16世紀後半～17世紀に出土するものであると指摘できる。

以上のことから、小野編年碗E-IXB類は、文様は碗E群系統を持ち、器形は饅頭心を脱し、次の段階に進んだものであると評価すべきであると考ええる。

おわりに

今回の研究では、小野正敏が碗E-IXB類を碗E群の外反するタイプのものとしているのに対して、文様は碗E群系統を持つが、器形は饅頭心の時代を脱し、次の段階へ進んだものであるとの結論に至った。

「饅頭心」を備えない要因として、型作り技法を用いた可能性がある。今回収集した碗の中には、1613年沈没のヴィッテ・レウ号の器形特徴⁽²¹⁾のeverted lipのように(第5図参照)、型作りの特徴である外反した口縁端部がまくれ上がる形状のもの(特に第2図-2)が見られる。これは、次の段階に出現する型作り成形の兜鉢を彷彿とさせるものであり、検討が必要である。

		小野編年碗E群		小野編年F群	豊後府内から出土した碗E群IX類	
		VII A	IX B	X	B a	B b
口縁部に四方禪文		○	×	×	○	×
外面	口縁部	・界線	・界線	・界線	・界線	・界線
	胴部	・暗花文	・鶴と蚊龍 ・如意雲	・唐草文	・花草文 ・暗花文 ・丸文 ・唐草文 ・蓮花文	・唐草文 ・宝文 ・唐人
	腰部	・界線	・界線	・界線	・界線	・界線
内面	口縁部	・四方禪文	・口帯	・界線	・四方禪文	・界線 ・なし
	胴部	・なし ・文字 ・稀に暗花	・なし	・なし	・なし	・なし
見込		・牡丹唐草 ・山水 ・折菊	・動物	・唐草の花部	・花草文 ・唐草文	・蚊龍
高台内		・富貴佳器 ・永保長春 ・長命富貴	(欠先)	・なし	・萬福攸同 ・異体字	(欠先)

表2 16世紀末の青花文様
碗E群と碗F群は、小野1982を参照に作成

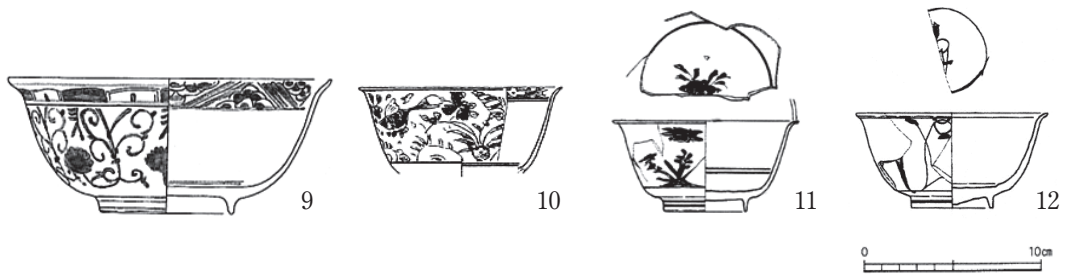


図4 堺・大坂から出土した景德鎮系青花

9. 『堺環濠都市遺跡調査概要報告-SKT289地点』 10～12. 大坂城船場(徳川初期1)



図5 ヴィレッテ・レウ号の器型分類

中世大友府内跡の出土傾向が、他の遺跡でも見られるか、同時代の代表的な遺跡である堺環濠都市遺跡出土の碗E-IXB類を確認した(第4図参照)。この遺跡は、慶長20(1615)年焼土層の陶磁器組成を示す堺環濠都市遺跡SKT289地点の西側調査区⁽²²⁾から、碗E-IXB類に近い器形特徴をもつのが出土している(第4図-9)。これは口径18cm以上あるので、碗よりは、鉢に分類すべきものといえる。また、第4図の10～12は、大坂城船場の元和6(1620)年と7(1621)年の紀年銘をもつ木簡と共伴する遺物群⁽²³⁾が出土する層から確認されている。しかし、文様は碗E-IXB類とは異なっていることから、17世紀の文様構成については今後の課題である。

最後に、今後は碗E-IXB類の検討の研究を行っていくことで、16世紀末～17世紀前半の青花の形式変遷をさらに明らかにしていきたい。

[註]

- (1) 小野正敏 1982 「15世紀～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究 No.2』 日本貿易陶磁研究会
- (2) 山根幸夫 1999 『世界歴史大系中国史4 明～清』山川出版、藤岡一 長谷部楽爾 1976 『世界陶磁全集14 明』 小学館
- (3) 大橋康二は「蘇麻離青」の産地を、コバルトの現在の主な産地であるアフリカ各地の原料の集積地であるソマリアを意味しているとしている。大橋康二 坂井隆 1994 『アジアの海と伊万里』 新人物往来社
- (4) 「海禁」により困窮していた福建省の沿岸部の住民などによる密貿易が盛んに行われていたが、地方官憲が黙認していた。
- (5) 景德鎮付近の楽平県産の陂塘青で、コバルト以外に鉄・マンガンなどの他の金属成分が含まれている。
- (6) 山根幸夫 1999 『世界歴史大系中国史4 明～清』 山川出版、座右宝刊行会 1976 『世界陶磁全集14 明』 小学館
- (7) 上田秀夫 1982 「根来寺出土の染付について」『貿易陶磁研究 No.2』 日本貿易陶磁研究会
- (8) 上田秀夫 1991 「16世紀末から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への予察」『関西近世考古学研究Ⅰ』
- (9) 鈴木秀典 1990 「17世紀の貿易陶磁器に関する研究成果」『貿易陶磁研究 No.10』 日本貿易陶磁研究会
- (10) 續伸一郎 1995 「中世後期の貿易陶磁」『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- (11) 森田勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類について」『貿易陶磁研究 No.2』 日本貿易陶磁研究会
- (12) 1と同じ。
- (13) 小野1982の論文内では、碗A群の実測図を小野が持っていなかったため、インドネシア・トロウラン出土の赤絵の碗を参考資料として図版に載せている。
- (14) 小野編年碗D群は、漳州窯の調査が進んだことにより、漳州窯系青花碗であることが分かったため、使用されなくなった。また、最近では小野編年C群の器形特徴をもつ漳州窯系青花碗も発見されている。
- (15) 「饅頭心」は、永楽期でも見られる。
- (16) ヴィッテ・レウ号の中の分類で、口縁部が外反するカップとして紹介されている。
- (17) 佐賀県立九州陶磁文化館 2008 『古伊万里の見方シリーズ5 形と用途』を参照に、口径10cm未満のものを小碗、

口径10cm以上のものを碗とした。

- (18) 呉承洛 1937 『中国度量衡史』 商務印書館
- (19) 大分市史編纂審議会編纂 1987 『大分市史 中巻』 双林社
- (20) 坂本嘉弘・玉永光洋 2009 『シリーズ「遺跡を学ぶ」-56 大友宗麟の戦国都市 豊後府内』 新泉社
- (21) 森村健一 1987 「“Witte Leeuw”号の陶磁器」『貿易陶磁研究No.7』 日本貿易陶磁研究会、森村健一 1992
「“Witte Leeuw”号の陶磁器(2)」『関西近世考古学研究Ⅱ』 関西近世考古学研究会
- (22) 堺市教育委員会 1991 「堺環濠都市遺跡調査概要報告—SKT289 地点—」『堺市文化財調査概要報告』
- (23) 森毅 1997 「大坂出土の十六・十七世紀の陶磁器—美濃陶器を中心に—」『東洋陶磁』 東洋陶磁学会。また、森毅の論文内では、元和6年と7年の紀年銘をもつ木筒と共伴する遺物群を徳川初期1と呼んでいる。

引用・参考文献

- 阿部猛 2006 『度量衡の事典』 同成社
- 上田秀夫 1982 「根来寺出土の染付について」『貿易陶磁研究 No.2』 日本貿易陶磁研究会
- 上田秀夫 1991 「16世紀末から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への予察」『関西近世考古学研究Ⅰ』
- 小野正敏 1982 「15世紀～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究 No.2』 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1985 「出土陶磁よりみた15,16世紀における画期の素描」『Museum 日本陶磁史研究—2— <特集>』 東京国立博物館
- 大分市史編纂審議会編纂 1987 『大分市史 中巻』 双林社
- 大橋康二・坂井隆 1994 『アジアの海と伊万里』 新人物往来社
- 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2005～2015 『豊後府内1～19中世大友府内町跡第5・8・9・10・11・12・13・16・18・20・21・22・28・29・30・31・34・35・36・40・41・42・43・48・49・51・52・55・61・67・68・69・71・72・75・76・77・78・79・80・91・92・93・96・99次調査区』
- 大分県立埋蔵文化財センター 2019 『蔭山万寿寺跡旧万寿寺跡第6～10次調査区』
- 大分市教育委員会 2002～2018 『大友府内3～6・9～32中世大友府内町跡第3・4・14・15・25・26・27・39・45・53・57・59・60・73・74・81・83・84・87・97・101・103・104・105・106・107・108・111・112・113・114・117・120・121・122・123・126・127・129・130・131・132次調査区』
- 大分市教育委員会 2015～2019 『大友氏館跡1～3大友氏館跡第1・3・4・7・12・15・16・17・20・21・23・25・28・29・30・31・32・33・34・35・36次調査区』
- 呉承洛 1937 『中国度量衡史』 商務印書館
- 坂本嘉弘・玉永光洋 2009 『シリーズ「遺跡を学ぶ」-56 大友宗麟の戦国都市 豊後府内』 新泉社を参照
- 佐賀県立九州陶磁文化館 2008 『古伊万里の見方シリーズ5 形と用途』
- 堺市教育委員会 1991 「堺環濠都市遺跡調査概要報告—SKT289 地点—」『堺市文化財調査概要報告』
- 鈴木秀典 1990 「17世紀の貿易陶磁器に関する研究成果」『貿易陶磁研究 No.10』 日本貿易陶磁研究会
- 續伸一郎 1995 「中世後期の貿易陶磁」『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 藤岡了一・長谷部楽爾 1976 『世界陶磁全集 14 明』 小学館
- 森田勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類について」『貿易陶磁研究 No.2』 日本貿易陶磁研究会
- 森村健一 1987 「“Witte Leeuw”号の陶磁器」『貿易陶磁研究No.7』 日本貿易陶磁研究会
- 森村健一 1992 「“Witte Leeuw”号の陶磁器(2)」『関西近世考古学研究Ⅱ』 関西近世考古学研究会

16世紀後半の青花碗に関する検討—中世大友府内町跡出土の小野編年碗E-Ⅸ類について— (幸)

森毅 1997 「大坂出土の十六・十七世紀の陶磁器—美濃陶器を中心に—」『東洋陶磁No.12』 東洋陶磁学会

山根幸夫 1999 『世界歴史大系中国史4 明～清』 山川出版